

18. 太陽を探しに ～いのちの湖へ～

各務原市立稲羽西小学校6年

小島 礼菜 北川 苑佳 澤田 真衣
宮崎 夏歩 磯貝 香奈 横山 真央



敦賀市立咸新小学校6年生一同

第一章 はじまりの本

「へえーっ、ここが新しい家か……」

あたしは安く売っていた中古の家を見上げた。

名前はサニー、十二歳。スポーツばんのうとか、頭がキレルわけでもなく、フツの子。

お父さんのしゅっちょうでここにやってきた。

「おーい、サニー！ 荷物はこぶぞ！」

「はあーい」

荷物運びはいやだけどちょっと楽しみ。

でっかいダンボール箱を持って家へ入った。

「うわっ、きれいじゃん」

しょせん中古と言っていたのは取り消さなくちゃ。

前の家よりずっといい。じっと見入ってたら。

「あら、サニー。二階へいらっしゃい。あなたの部屋、きれいで広くってびっくりしちゃうわよ。わっ、このキッチンいいわ～」

母さんったら、興奮しすぎ。

タン、タン、タン

かるやかな足どりで二階の部屋の前まで行く。

バン！

ドアを開けると、サッと光が差しこみろうかがきらりとかがやく。

「あっ」

部屋をあらためて見回してみた。

広さは六じょうくらい。まどからは光がさんさんとふりそそぎ、床が大理石の様にかがやいている。

家具はもちろんない……はずだった。でもあった。

「おかしいな、なんでこんなものがあるんだろ」

おもわず一人言を言ってしまった。

だって、それは光が差していない所に石像のように立っていたんだから。

それはぎっしりとつまった本だなだった。

もとの家に住んでいた人が忘れていったのだろうか。

二、三冊手にとってみると、ほこりっぽく、中はリアルなさし絵と砂のような文字が

びっしり並んでいた。

心と上の一冊に目が吸いよせられた。

題名は『命のみずうみ』。

開いてみると、美しい空と美しい女と美しい湖がのっていた。

空は光をたたえ、女は女神かと思うほどきれいだった。

湖も美しく……あれ？ 湖の中が闇のように黒くそまり、雲が流れている！ 目をこすり、ほっぺたをつねっても、雲はゆるやかに流れていた。不思議な本だ。確かに神びてきな香りをただよわせている。湖をススス……となぞっていると、ズルッ、きゃっ！ 指がっ、本の中へ、湖の中へ吸いこまれていく。

引っ張られる、キャーッ！

黄昏が夜にのみこまれていくように、あたしの意識は闇へすべりこんでいった。

「う……」

ここはどこ？ あたしなにしてたんだっけ？

引っこしをして、家に入って、部屋を見て、本があって、あっ、そうだ、あたし、本の中に吸いこまれて……？ 絶対あり得ない！

まずここはどこか考えなくちゃ。あたしはズキズキと痛む頭で一生けん命考えた。でも、本の中としか思えない。だってまわりはしばふ。

後ろにはでかいお城があるんだもの。

「ああ、もういやにー」

ドーン！ ドンドン！

ものすごい音がした。

これって、大ほうの音かしら。

音がした方へ歩いて行くことにした。

広がっているのは草原ばかり。

男が一人こちらに向かってかけてきた。

「あの、すみません。さっきのドンっていう音なんですか、今なにがおこってるんです？」

男の人はきょとんとした顔になり、少しだまっていたかと思うと、急に顔をほころばせた。

「もしや、あなたが……選ばれし人か？」

は？ 何言ってるの？ この人。

「まちがいない。さあっ！ 女神様の所へ行こう。早く！」

わけもわからず手をつかまれ、どこかへ走り出す。

十五分ぐらい走り続けると、大きな湖にでた。

「女神様！ この方がきっと選ばれし人です」

男はそう言った。

「そうですね……。その方こそ選ばれし人です。よく見つけましたね」

りんとして、すみきった声が湖にひびき、きれいな女の人のがでてきた。海のようなかみと目を持ち、ぴちっとしたドレスとショールを着ている。まさに理そうの女の人というべきだろう。

あたしはその時ひらめいた。
きっとあの本にのっていた女神だ。
そういえば湖もよく似ている。

「あなたの名は？」

「あっ、あのっ、サニーといいます」

「そうですか。晴れという意味ですか……。サニー、ぴったりですね」
何にぴったりなの？

「本の中へ吸いこまれたのですね、分かっています。家へもどりたいでしょう」

「はい、ぜひもどりたいです」

「では、あなたに旅に出てもらいます。この本地図（ほんちず）を受け取りなさい」
えーっ。どうということ？ 旅ってなに？

あたし夢の中にいるのかしら。

「今、この地は見てのように暗く、戦争が続いているのです。魔女が太陽をうばってしまい、私たち女神軍と魔女軍とで戦争をしています…。別の地から来た『選ばれし人』が三十年続いた戦争を止めてくれるといいます」

「無理です。あたし無理よ」

「サニー、本地図をひらいて下さい」

あたしはおもわずひらいてしまった。

「あなたは本地図をひらきましたね。その本のとおりに進み、戦争をとめなければ、あなたは一生家へ帰れません」

あたしはいきりたった。

「ひどい！ そんなのってフェアじゃないわ！」

「でも仕方ありません。一生帰りたくないなら別にいいですよ」

この女神様はなかなか口たっしゃでがんこなようだ。

あたしは十分ほどうで組みをして考えてみた。

あたしはなんとしても家へ帰りたい。

でもそのためには、がんこな女神の言う戦争をとめ、太陽を取りもどさなければいけない。

よし。

「女神様！ あたし、行きます。戦争をとめ、太陽を取りもどします！」

「そういつてくれると思っていました、サニー。あなたにともを付けましょう」

おともか……。どんな子だろう。

「城魔導師リサ！ ビポラフォンのキラ！ いらっしゃい！」

フワリと少女と小動物が現れた。

「はじめまして！ 私は白魔導師のリサ。医りょう魔法を得意としています。こちらはビポラフォンのキラ。きゅうかくがすぐれているんです。これからよろしくおねがいします。サニー！」

リサとキラはぺこっと頭を下げた。

リサはひらひらとしたしっそな白いローブに、道化師のようなぼうし。キラは、ウサギの耳にリスのしっぽ。

「キュー」と鳴くととてもキュートな小動物。

この二人(?)ならうまくやっていけそうだ。

「白魔道師リサ！ ビプラフォンのキラ！ そして選ばれし人、サニー！ さあ、行くのです。本の地図とともに！」

第二章 失われた太陽

あたしは本地図と二人と共に旅に出る事になった。

でも、戦争なんてどうやって止めればいいのか？ 第一、戦争の中心にいる人は誰なの？ そんな疑問を持ちながら服を握り締めた。

女神様のくれた服は、戦うの専門って感じの服で、しかも剣まで付いている。……これで戦うの？ ホントに戦争を止めるんだ……と実感した。本地図を開くと、一ページ目には『昔、悪い魔法使いが太陽を奪ってしまいました』と書いてある。そしてその横に、黒い女の人の絵と、その手にオレンジ色の丸いものが握られていた。

……これが太陽かな？ だとするとこの人は魔女……ページをめくると『ある日、太陽を求めて長い長い戦争をとめるため、選ばれし人が現れました』と書いてある。

ん？ ……選ばれし人……って……。えー！あたしのこと!? じゃあこの本は…。

あたしは急いでページをめくる。

「そこまでしかかいてないよ〜」

その時、耳元でリサの声があった。

「だって、これから冒険するんでしょ？ だから、ここまでしか本はないよ」

「えっ…どーしてわかるの？」

「えー……キラが言ってるから」

するとキラはキューっと鳴く。あたしには『キュー』としか聞こえないのにリサには言葉がわかるらしい。

「この本はすごく便利なんだって」

ふーん……魔導師ってすごいなー。あたしは戦争の音のするほうに歩く。と、その時、

「なーにしてんのーっ？」

明るい声があった。あたしが振り向くと、そこには瓜二つとっていいほどそっくりな女の子がいた。

「あたしはルナ」

「私はレナだよ♪」

そして、

「——敵？」

あたしはルナとレナをにらむ。するとレナが笑った。

「あははははっ、敵なら名前教えないって！」

あたしは少し緊張をといた。

「でも、敵じゃないなら何？」

リサが聞く。そう…敵じゃないなら。みかた？

それとも……通りすがりの人？ あたしはルナとレナを見つめた。ルナとレナは、よ

く似た編み上げの服を着ていて、二人とも弓を持っている。弓使いかな？、
「あたしたちはあなたたちと一緒に旅するパートナーだよ。女神様に言われてきたんだ」
とルナ。

「私たち…結構強いよー？」とレナ。

あたしはチョットとまどいながらも仲間になるのを許した。

仲間になれば戦力大だ。

あたしたちは戦争の音のする方にひたすら歩いた。ただもくもくと歩いた。三時間くらい歩いたのにまだつかない。

大砲の音が近くなったと思ったら、また遠くなる。あたしは、大きなため息をついた。みんなもそうとう疲れているようだ。あたしは道を変え、町の方に歩き出した。

「……誰か来る……」

リサが言った。

すると今まで寝ていたキラが急に耳を立て、キュー（なんだか怪しいニオイだ…）と言う。

あたしはサッと身構えた。

「ヤバ…こっちに来るよ？」

レナが言う。どうする……もう、まともに体力も残っていない。

どうしよう……すると、周りが濃い霧に包まれた。

リサが防御陣をはる。足音が聞こえる。

……こっちに来る……急に足音が止まった。

「……こんな安い防御……ありえない……」

その人は、リサの魔方陣をあっさりといてしまった。

「……誰……？」

みるみる霧が晴れ、あたしと同じくらいのとしの女の子がいた。

魔女らしい……が、真っ黒の服を着て、何か邪悪なオーラを放っている。『いい魔女』
とはいえなさそうだ。

人は見た目で判断してはいけないというが、この人はヤバイ！ 心からそう思った。

「……あたしはミル。太陽を奪ったのはあたし。あなた達は、相当疲れているでしょ？
だから、今日は忠告に来たの」

ミルが言う。

「忠告？」

「戦争を止めるのはいいけど……、あなた達、死ぬわよ」

ミルがハッキリと言った。あたしはカッとなって、

「そんなの！ わかんないじゃん！」

大声で言ったが、ミルは消えてしまった。

あたしは気を失い、夢を見た。

そこにはミルがいて、泣いていた。そして、

「リオ……リオ……願いはかなえるわ……」

と言っている。

あたしが思わず声をあげると、ミルがユラユラとあたしの前まで来て、あたしを睨み

つけた。その目の鋭さに、足が動かなくなる！

——誰かの記憶が流れ込んでくる。ミル？ 今のミルより少し幼い。もう一人、女の子がいる。ミルの記憶かな。

二人は夕日を見て、楽しく話している。女の子が、
「きれいな夕日、こんなきれいな夕日、自分だけのものにしたいな～。でもミルには見せてあげるからっ」

ミルは、

「ありがとう、リオ、大好き」

リオ？ リオって……さっきミルが言ってた人？

じゃあこの子がリオ……。するとリオが、

「あたしも大好き」

その時、いきなり大人が何人も来て、

「この子だ！ この子がいるせいで災いが……！ 捕まえろ！」

言うなりリオを魔法で捕まえようとしてくる。

ミルは必死に対抗するが、リオは捕まえられてしまった。

そして数日後、リオが死刑になったという新聞を見る。

ミルの感情が流れ込んできて、恐怖と悲しさで凍りつく。

ふと「こんなきれいな夕日、自分だけのものに……」という言葉がうかんだ。あっ！
そっか、それでミルは太陽を……。

でも、それで苦しんでる人もいるのに……。

目が覚めた。あたしはスグ夢のことを話した。

「もしそれが本当なら、必ず太陽は取り返さないと」

ルナの言葉と、

「これじゃ、ミルも苦しんでるよ！」

というリサの言葉で元気がわき、またもくもくと歩いた。すると、

「離せって！ オイヤめろ！」

どこからか声がする。

あたしたちは声のするほうに走った。そこにいたのは、あたしと同じぐらいの歳の真っ赤な髪の女の子だった。

周りに三人の兵士のような人がいる。

「やめろ！」

その子がさけんでも、助ける人は誰ひとりいなかった。

「助けよう！ その兵士さん、やめなさい」

「何だこいつ！ やっちまえ！」

あたしはリサに合図し、魔法の準備をさせ、正面から兵士たちに向かっていった。

ルナとルナのいった矢が刺さり二人が倒れた。

作戦成功！ こんな時のために作戦を考えていたのだ。

「もう同じ手はきかないぞ！」

あたしは兵士に向かっていった。

剣と剣の戦いだ。あたしは剣の修行なんてやってないから断然弱い。どんどん追いつめられていくが、リサが魔方陣でたおした。

「ありがと。おかげで助かったよ」

さっきの女の子が言った。

「あたしはリン。助けてくれたお礼……っていうか。お願いなんだけど……あんたたち、太陽をとり戻しに行くんだろう？ あたしもつれて行って」

「え！」

あたしは意外な言葉に声をあげてしまった。

「いーよ」

答えたのはリサ…じゃなくてキラだった。

「ありがとう。きっと役に立つよ」

まあ……反対という訳でもないし、人数は多いほうがいいか……。

こうして新しい仲間リンが加わった。

第三章 サニーの不思議な力（ドリームマジック）

サニーとリサとキラは、戦場の町に着いた。

銃や大ほうの音はもちろん、ばく発の音も聞こえた。サニーは、

「や…やっぱり…やめる……」

「エー？ 何弱音はいてるのよーっ！」

「だ…だって……うたれたらどうすんの～っ！」

「もーっあの二人（レナとルナ）のことわすれちゃったの？」

そう言ってリサは二つの姉妹の人形を出した。

「あっ！ そうだった。でも何で人形に？」

「さっきケンカしてたから魔法で変えた」

「でも人形にしちゃダメじゃん！」

「キラの力で本物に変えられるんだから！ キラ！ あの魔法を！」

「ミュミュ…ミュミューツ！」

パアアアッ

「アーツ、苦しかった」

「リサッ！ なんで人形にしたの？」

「まーまーっ。早く仲直りしなよ」

バアアアンツ

女神が言っていた魔女が『じゅうげき魔法』をくり返してきた。

「ミル様～！ これで七つの力を！」

「……。ついにこの時が来た……。絶望の影世界にする時を……」

「ごめん、わたし魔女の所に！」

「ダメッ！ サニー、命を落としたりはどうするの？」

「でも太陽を早く取り戻したいもん！ リサ達もそうでしょ？」

私は向かった。
「何が絶望の影の世界だ！ 暗い世界より、明る……」
「うるさい！ こいつらを早くたおせ……」
　　バンッ、バンッ！　バンッ！
「キャーッ！」
　　バンバンッ
「うっ……」
（あきらめない……、絶対に……、負けない……、まちがえてるやつなんかに……。夢をバカにするやつなんかに……）
「負けるもんか！」
　　サニーが言ったしゅん間……、
　　パアアアッ
「ゆ…指輪！？」
「あれって……ドリームリング！」
（何か力が……。こうなったらこの力で……）
「ドリームマジック！」
「うわあああっ！」
（やった……。でも…ドリームマジックって？ この指輪は何？ わたし……どうなっちゃったの……！）

第四章　ミルの魔力

とつぜん本が光り出した。
サニーが本を開くと、ドリームマジックの事が書いてあった。
「ドリームマジックとは、強く何かを心に願うと、その心にはんのうしドリームマジックが現われる……だってさ」
「クッククッ。こんな力ごときで勝ったつもりか？ 笑わせるな。まあいい。ここに
いるやつらをたおした後に私の所に来い」
　　ミルが消えた。
「ね、ねえ。あたし…あんなやつに…勝…てるのかなあ」
「ねえ、サニー。指輪…どうしたの？」
「へ？ 指輪ない！ どこにおとしたんだろう」
　　キラが、
「ねえ、サニー、あの本全部読んだの？」
「……あ！ まだある。ドリームマジックには五つの力がある。その力は、ある心によって出来ていて、どこにあるかは分からない。ドリームマジックは、じゅもんをとねえる事によって発動をする」
「なるほど、それでなくなってしまったのか」
　　後ろからたいほうの球が飛んできた。
「レナ、あぶない。守らなきゃ！ ドリームマジックー！」

するとあの指輪が発動し、気づくと目の前に大きなたてがあり、たいほうの球がはじきとばされていた。

「それはドリームマジックの一つ、ドリームバリア。その指輪にこめられている三つの力が使えるよ。ドリームガン、ドリームバリア、ドリームソード、ドリームリボン、そしてドリームウィング……」

「へーそうなんだ……て、あんただれよ！」

「もうしおくれました私、ネコ族のラットと申します。これから、あなた達のパートナーとなり、日々やくに立とうと思います」

「私が時間を少しだけ止めます。その間に魔女のもとへ行ってください」

サニーたちは魔女のもとへついた。

「やっと来たな」

「早く太陽を返せ！」

第五章 戦い

「ミル…太陽を返せ！」

「……お前らにやるのは……コレだ！」

大きなばくだんがサニー達の元で爆発した。

左腕にはばくだんが当たったルナがバタリと倒れた。

サニー達はルナの元へ駆け寄った。左腕から血が流れていた。

ルナが苦しそうに叫んでいる。

サニーの気持ちはいかりでいっぱいになった。

「みんな！ ミルと戦って太陽を取りもどして！ 私はルナの怪我を医りよう魔法で治せるかやってみるから……！」

リサが言った。

パアアアア！

「ドリームマジックー！」

サニーは精一杯大きな声で叫んだ。

ピカーーッ！

「うわあああ……！ くっ……。こんなのに負けてたま……るか……っ！」

最初は苦しそうだったが、ミルはすぐに元にもどった。

「こんなので私に勝てると思っているのか？ クックックッ……」

「あなたには……夢とか希望とか……ないの？」

「は？ いきなり何を言うんだ？」

ミルは笑っている。

「いいから……！ 夢とか希望とか、ないの？」

サニーは叫んだ。

「私の夢は絶望の影世界にすることだ……」

サニーのいらだちがピークになった瞬間、

ドガーーン！

熱く赤い光がサニー達を囲んだ。

「？」

「油断したな……今、お前たちは、一人ひとりが熱い炎に、つつまれている……もし私が指をならせば……一瞬で黒こげだ。それがいやなら……私の部下にしてやってもいいが……」

目の前が、真っ赤でみんなの様子が見れない。

熱い……熱くてとけちゃいそう……。

でも、ミルの部下なんてなりたくもなかった。

「ミルの部下になんか死んでもなりたくないっ！」

サニーは叫んだ。

「わたしもっ！」

「よくもそんな口を利いたな……私の最大の力を出してやる！」

「やめてサニー！ レナ！ リン！ やめて！」

リサが叫んでいる。リサ…ごめんね。

サニーは、まぶたを、ぎゅっととした。

(いつでもこい…！)

熱気がなくなった気がした。おそろおそろまぶたをひらくと、真っ赤な炎ではなくラットがいた。

「ラット！ きてくれたんだ……」

「もちろんです。とにかく、ご無事でなによりです」

「よくも……よくも私のジャマをしたな……！ ゆるさん！」

ドゴーン！

ものすごく大きい爆発音がして、思わずまぶたをとじた。

……みんなの声が聞こえる。

よかった無事だったんだ。でも所々に傷があった。

みんなミルをにらんでいた。

その時、

「私、リサのおかげで腕、動かせるようになったから！」

ルナがうれしそうに腕を動かしてみせ、みんなはよろこんだ。

「みんな、太陽を取りもどして！ 力をあわせてがんばろう！ 準備はいい？」

一人ずつ、あたしはみんなの顔を見る。みんなうなずいた。

「私には、こんなにも優しく仲間思いの仲間がいる！ だからミルには絶対負けない！」

バシンッ——

ルナとレナの弓がミルのこしに命中し、ミルがうめき声をあげた。

そしてリンがミルの右腕に刃物をさした。

ミルがさらにうめき声をあげた。

バーン！

リサの魔法が当たった。

「ぐ……くる……しっ……」

ミルの体は、ボロボロで血がダラダラと流れていた。

「ま…だ…わた…しは……か…げせか…いに…するま…で…は…いくら…でも…いきか…えって…やる……」

そしてニヤリと笑った。

「ドリームマジックー！」

　　パアアアア——

今まで見た事もないような、まぶしい光に、思わず目をとじてしまう。光はなかなか収まらなかった。

「な……なんなのこの光……ドリームマジックにこんなすごい力があったとは……」

「覚えているよ…わたしは…じごくからでも……影世界にするまでは…死なない…リオの…ため…にも……」

と、ミルは真っ黒な灰になって消えていった。

……私……勝てたのかな？

どうしてもサニーの心に引っかかる事があった。

ミルが最後に言った「リオのためにも」の言葉がどうしても引っかかる。

確かに「リオ」はミルにとって大切な人で「リオ」のために太陽をうばった。

太陽をうばったミルを見たら、きっと「リオ」も悲しむはずだ……。ミルのためにも太陽を取りもどさなければ……。

サニー達は歩き出した。

しばらく歩いているとキラが、

「キュー！」

と鳴き、ゴツゴツとした細い岩の間にすりと入っていった。

「あ…！　これは…地図！」

サニーが言った。

「あ、×印と一緒に太陽のマークが、ついている！　って事は……」

リサが言った。

「太陽のありかの地図！」

ルナとレナが声をそろえて言った。

ついに、あたし達は太陽のありかが書いてある地図をさがしだした。

第六章 よみがえる

「まで……」

ふりかえると倒したハズのミルから、黒い液体のようなもの出ている。

「私があんな力で倒されたと思うか！　ハハハハハ！」

黒いものはどんどん量を増し、やがてミルの形になった。

「——さっき消えたのは個体……」

あたしは何が起きたかまったく分からなかった。

「だから……ミルは……太陽をうばうため。いつのまにかほろんでしまったの……個体はもっと昔になくなっていたのよ……」

「ってことは、地獄からでも、はい上がってくるってこういうことだったの？」

「あのミルを倒すには、ミルの中心をソードでさすのが難しいけど一番確実な方法。」

「ま、みんなでかかればいいってことだろ？ んで、ミルが弱ったところでサニーが、ザクッと行けばいいんじゃないの？」

リンは単純にこう言っている。確かにそれが一番いいとあたしも思うけど……あのミルは――。

「さっきと同じようにはいかない。もっと強い力が必要……」

「でも、リンの言う事も一理あるよね。やんなきゃ始まらないし」

こうしている間にミルは呪文を唱えて、右手を開いてあたし達の方向へむけて何かを放つ。

「ドリームバリア！」

あたしが、バリアを張ったとたんに、まわりのものが、ぶっ飛ぶ。あたし、こんなに直接さわることをすらできないかも……。

ましてや、ソードをさすなんて……。

「やんなきゃ始まらない……」

あたしはつぶやく。みんなあたしの方を見た。

「あたし…、やってみるよ」

全員あたしの方を見てうなずいた。次の瞬間、ルナとレナの矢。

リンのクナイがミルに向かって飛ぶ。

最初の二、三発が黒いミルにささる。

「こんなものは、効かないと言っているだろう！」

何事もなかったかのように矢やクナイをぬき取り、バリアを張ってしまった。体にはキズ一つない。

（でもあたしが後ろから、トドメをさせれば気づかれずにミルも解放されるはず！）

あたしは、後ろからミルに近づく。

動きが止まったときがチャンスー。

（今だ…！）

あたしは、目をつむってミルにソードを……。目をあけると、ソードをつかんでいる手があった。

「ムダだと言っているだろう……」

ミルがソードをにぎりしめていた。声が出ない、体が動かせない。そうしている間にソードにひびが入ってきた。

（おれる！）

「フ……。貴様らも無力だな。トドメをさすのがこいつとは……。クックッ、おまえのお仲間もさぞ、悲しむだろう、こんな弱いやつに、私が倒されるワケが無――」

ミルが言いきろうとした時、どこからかフワッと声が聞こえた。

『ミル……。そんなことしちゃ、ダメだよ。その子、イヤがってるじゃない』

目をこすらすと、ミルの頭上に緑色にボンヤリと輝く丸いものがあった。

「え……リオ？」

ミルは丸いものの方へ体の向きを変える。

(今なら、ソードをさすチャンス！)

あたしは、ミルの手から、ひびの入っているソードをぬく。
そして――。

(ミル！ゴメン！)

ピシッ

――音がした。

「ぐっ」

――ミルの声が聞こえた。

――みんながザワついた。

ミルはガラスが割れるようにヒビ割れて、くずれていった。

そして、むらさき色にボンヤリと輝く丸いものが残った。

(そうか。あの緑色のものは、リオの魂だったのか！ だからミルの魂が解放された後
あの丸いものが残ったんだ)

その魂を、みんな一心に見つめていた。

(あたしの魂って何色なのかな……)

あたしが、そう思った時は、魂は、あとかたもなく、消えていて、いつのまにか、ミルの体や、戦った跡も、なくなっていた。残ったのは……。

「あ！ 地団！」

リサが、古くなって茶色くなった紙をひょいっと拾いあげる。

「ねえ見て。この真ん中の赤い丸いのが太陽じゃない？」

「あ。本当ですね」

とつぜんどこからかネコが現れて言う。

「その声？ ラット？」

「はい。本体はこっちなんです」

「うそっま、いや」

「ね。これからも一緒に行ってくれる？」

あたしがみんなに聞いた。

「もちろん。ね、キラ」

「キューっ」

「あたしも、いいぜっ」

「あたしたちもOK～」

「私も、良いですよ」

全員の返事を聞くと私は言った。

「ありがと！ みんな、さ、行こっ！」

こうしてあたし達は、太陽をさがしに行くのだった。☆

第七章 勇気ある選ばれし人たち

さあ、太陽を探しに行くたびが始まった。

サニー、キラ、ルナ、レナ、リン、ラットは足取りも軽く、どんどん進んで行く。

「私たちの力を合わせれば、太陽なんてすぐ 見つかるよ」

トリサ。

「そうだよね。私たちは最強だよ」

声を合わせて言う、ルナとレナ。

「おまえ達が最強？」

「ふざけたこと言うなよ」

「はっはっはっは、笑わせるぜ」

声のする方を見ると、サニー達一団とよく似た四人と二匹の一団が……。

「あなた達はだあれ？」

「ぼく達は、ビリー」

「ピカー」

「ミナ・マナ」

「リッキー」

「太陽を見つけた者は、選ばれし人として、永久にこの世界に英雄としての名を残されると聞いて、旅をしているんだ。ぼく達はこのずっと北の村ノースコーナーから来たんだ。ノースコーナーでは、ぼく達にかなう者は一人もいないんだぜ」

「見たところ、おまえ達は弱そうじゃないか」

「真に選ばれし人として、この世界に名を残すのはぼく達だ」

そう言うと、ビリー達は剣をぬき、サニー達に向かって来た。

「負けるか！」

ルナとレナが弓を構える。

「ルナもレナもやめなさい。ミルを倒し、三十年続く戦争は終わったはずですよ。争いをくり返すために太陽を探しているわけではないはずですよ」

とラットが叫ぶ。

「でも……」

ルナとレナがためらっている間にビリー達が襲いかかってくる。

「どうすればいいの！」

「あぶない！」

その時、サニーの声が聞こえた。

「ドリームリボン〜ン！」

すると、長い長い光の輪が空を舞い、サニー達一団とビリー達一団を結びつけた。静寂の時間が流れる。

「何があったんだろう？」

「ぼく達は何をしていたんだろう？」

ドリームリボンは争いをしている者達の心を結びつけるリボンだったのだ。

「伝説のドリームマジックを使えるなんて、やっぱりおまえ達が真の選ばれし人なんだね」

「ドリームマジックを使える人は最強の勇気を持っている人だと言われているんだよ」

「みんなの勇気なら、きっと太陽を探し出せるはずだよ」

「でも、おまえ達は何のために太陽を探すの？」

「それは、この世界に笑顔があふれるため」

サニー達は声をそろえて言った。

「ビリー達も一緒に太陽を探しに行く？」

とサニーが聞いた。

「いいや。ぼく達はノースコーナーにもどって、村の人達が笑顔になるために、自分達
の力を使ってみるよ。太陽がこの世界に現れるまで、遠くから応援しているよ」

「ありがとう」

「じゃあ、行きますか？」

「おー！」

それから、いったい何日がたっただろう。

みんなだいぶ疲れている。たしかに本地図には太陽の印がある。

しかし、それがどこだかわからないのだ。

「今日も見つからなかったね」

キラが言いました。続いてリンが、

「そうだね」

と答えた。

太陽がないので空が暗い。何も見えない中歩き続ける。林の中に入った。どんどん歩
いていく。何かが光っている。

「何か光っているよ」

リンが大きな声を出す。

「ホントだ、何だろう？」

とりさ。

「あっ、ほたるだ！」

「ホントだ、ほたるだ！」

久しぶりの明るい光だ。みんなの心に感動の灯がともる。

「きれいだね」

つらいときもあった。苦しいときもあった。

家族に会いたくなるときもあった。

途中でやめたくなるときもあった。

でも、ほのかなほたるの光を見て、心が温かくなった。

同じ物を見て感動し、みんなの絆はより一層深まった。

「がんばろう！」

「うん、大丈夫だよ」

「早く他のみんなにも明るい光を見せてあげないね」

すると、空から不思議な光が。

見上げると、それは月の光だった。

その光はどこまでもついてくる。

みんなはその月の光と共に太陽を探す旅を続けた。

向こうに一軒家が見える。

「すいません」

声を掛けると、おばあちゃんが笑顔で迎えてくれた。

「よう、来たね。子どもの足で旅をするのは大変だったろう。ゆっくり休んで行きなさい」

おばあちゃんのやさしい言葉が心にしみる。

「ここらも昔は、温かい太陽の光にあふれ、花が咲き乱れていたんだけどねえ。私は選ばれし人が来てくれるのをず〜っと待っているんだよ」

「選ばれし人？」

「おばあちゃんはずっと昔からここに住んでいるの？」

「おばあちゃんは太陽がどこにあるか知っているの？」

「私が聞いた話によると、奪われた太陽は、もう一度生まれ出るまで、命の奥に沈んでいるらしい」

「えっ、命？」

サニーが叫んだ。

「私がこの世界に来た入口は『命のみずうみ』の本だったわ！」

「それだ！」

ルナとレナも喜びの声を上げる。

「地図は？」

ラットが地図を広げる。

「ここは、命のみずうみの奥底なんだ」

「ここからはずいぶんあるね」

すると、ラットが話し出した。

「確実に行くには……そうだ！ サニーのドリームウィングでみんなを命のみずうみへ飛んでもらうんだ！」

「いい考え！」

とルナとレナ。

みんなもうなずく。

「でも、ドリームウィングでこれだけの人数をはこべるだろうか？」

「サニーの思いが強かったらできるよ」

「みんなも一緒に願おう！」

「わかった、やってみるよ」

「ドリームウィング！」

サニーは強く願った。

「ういてる！」

「やったね、サニー」

「さすが、サニー」

「あっ、向こうにみずうみが見える」

「ホントだ」

命のみずうみは青く輝き、次々と新しい水をわき上げている。

「あそこにあるんだね」

「太陽をよみがえらせるんだね」

「新しい世界が誕生するんだね」

「笑顔いっぱいだね」

サニーはもう迷わなかった。

「ドリームバリア」

バリアをはってみずうみの奥へもぐって行く。

「あった」

みずうみの奥から、まぶしい光が。

「お願い、太陽。もとの世界にもどって」

サニーが願う。

「みんなにあたたかい光を」

あたたかい声が響き渡る。

「ドリームガン」

やさしさにあふれた声は、やわらかい光を飛ばす。

その光に包まれ、太陽は上へ上へ昇り始めた。

「やったあ」

さあ、新しい世界の始まりだ。

あたたかい光に包まれ、花は咲き、小鳥は歌う。

あのおばあちゃんも目を細めて笑っている。

暗闇におびえていた子どもたちも声を上げて笑っている。

「サニー達やったな」

ビリー達も喜んでいる。

「太陽の光のおかげで新しい作物も育てられる。これでノースコーナーのみんなもおなかいっぱい食べられるぞ。ありがとう！」

『勇気ある選ばれし人たち

サニー

リサ

キラ

ルナ

レナ

リン

ラット

この世界にあたたかい光と笑顔をありがとう。

一人ではできなかった。仲間がいたから乗り越えられた』

本地図の最後のページには、この言葉が刻まれていた。